

デカルト哲学は<教育思想>でありうるか?

——読書・学識・そして反復——

林 洋輔 (筑波大学)

デカルトを「教育 *institutio*」あるいは「学識 *eruditio*」の観点から読み直す研究は、彼の形而上学および自然哲学に対するそれに比しても僅少である。しかし近年では Kambouchner (2008,2009) あるいは Carraud & Olivo (2013)、また Garber(2001)やわが国の相馬(2001)などによって断続的ではあるが「教育思想」としてデカルト哲学を読み直す議論が続けられている。これらの先行史を受ける本発表では「教育哲学としてのデカルト思想」の成立に向け、主体による行為の<反復>がデカルトにおける<教育の方法>として位置づけられることを結論に据えて議論を進めたい。

デカルトは中後期の諸著作において、主体による行為の<反復>の必要性および重要性をくりかえし説いている。まず『序説』第二部における数学的な諸規則(VI, 18-22)ならびにいわゆる<暫定道徳>(VI, 22-28)について、一方ではこの数学的な諸規則が「練習 *pratiquer*」(VI, 22)によって、また他方では道徳が「長い修練 *un long exercice*」(VI, 26)によって習得されうるとする彼の指摘に着眼したい。言い方を変えると、主体が数学的な諸規則およびモラルの習得を図るに際し、行為の<反復>を含意する「練習 *pratiquer*」(VI, 29)の必要であることをデカルトが指摘した文脈に着目する。主体の生を導くものが行為の<反復>によって得られるならば、その<反復>とはいわば<主体の育成>の方法——つまり<教育の方法>——に相当するものと考えられるからである。

ところで『序説』で述べられたような<主体の育成>を行為の<反復>から目指すとする言及は、『ヴォエティウス宛て書簡』第四部(VIII-B, 39-55)にも現れる。というのも、「真に学識ある人々 *vere eruditi*」(VIII-B, 44)へ至る条件としての<読書 *lectio*>(VIII-B, 42)の方法について、主体は著作のうちの優れたものを「頻繁にしばしばくり返し読むことから *paulatim ex frequenti & saepius iterata*」(VIII-B, 41) 習得すると共に、「ただ最良の書物をくり返し頻繁に読むことから *solâ optimorum lectione, eâque iteratâ et frequente*」(VIII-B, 42) 学識の獲得が期待されるとデカルトは言及するからである。すなわち、行為の<反復>から<主体の育成>を図ることの意義が『序説』から継がれる。そればかりではなく、1645年5月18日付けエリザベト宛て書簡(IV, 202)および同年8月4日付け同宛て書簡(IV, 265-266)において、<反復>から培われた主体の数学的思考がいわゆる<決定的道徳>をも基礎づけることが明らかとなる。同様の論理は『情念論』(XI, 385,438,453 etc.)でも明瞭に確認されるものであり、主体における行為の<反復>がデカルト的<教育の方法>として定められることの充足的な論拠が浮き彫りとなる。発表ではすでに研究史で指摘された彼における「教育の目標」および「良き教育 *la bonne institution*」(XI, 453)の実質を併せ、「教育者デカルト」の成立に向けた論拠を示していく。そして結論の先には、Hadot(2014)の指摘した「精神の修練 *Exercices spirituels*」がデカルト教育論における思想的基盤を成すものとして見えて来るだろう。

なお本発表は博士論文の公刊である拙著『デカルト哲学と身体教育』(道和書院、2014年)における議論の進捗として位置づけられるものである。